



土の中のガラス瓶

昨年、市内の遺跡で試掘調査をしていた時のことです。重機で地表付近の土を掘り下げてもらっていると、土の中から薄緑色のガラス瓶がひょっこりと顔をのぞかせました。持ち帰って土を洗い流すと、そこには有名な炭酸飲料の文字が。近年、ペットボトルなどのプラスチック製品が広く普及していますが、数十年前までは容器の主流といえばガラス製品や陶磁器たちでした。今回出土したガラス瓶も、その字体から昭和四十年代後半に出回っていたものようです。

今も昔も、ひとは比較的住みやすい場所で生活を営みます。そのため、先史時代の遺跡から、ごく新しい時期の遺物が出土することは珍しくはありません。私がまだ学生だった頃、ある縄

文遺跡の発掘現場から出土した陶器製の湯たんぼの破片や明治時代の目薬を入れるガラス小瓶をみて不思議な感動を覚えた記憶があります。

遺跡から出土する新しい時期のガラスや陶磁器は、数百年・数千年前の遺物に比べると歴史が浅く、調査によっては脇に追いやられがちかもしれません。しかし、これら新しい遺物も、人々の当時の暮らしがうかがえる大切な資料のひとつだと私は考えています。

試掘調査を行った場所は、調査の結果から土を切り盛りすることで周辺を平坦にならしていることが分かりました。先のガラス瓶は、整地作業で動かした土と共に紛れ込んだのでしょうか。約五十年もの間、土の中で眠っていたガラス瓶をみると、土木工事を行っていた作業員さんが休憩中に飲んだものか、はたまた近所に住んでいた学生さんが下校中に飲んで捨てたものだろうかといった様々な想像が膨らみます。

私自身、東北から釧路に移り住んで丁度十年目になります。小さな節目の年を釧路の地で迎えるにあたって、昔の釧路はどのような風景が広がってい

たのだらうと思うようになりました。先輩方からはまだまだと笑われそうではありますが、今回出土したガラス瓶をみると、自分が居ない昔の釧路が不思議と身近に感じられるようになりました。

近年では近代考古学や戦争考古学といった新しい遺物に焦点を当てる研究も多くみられます。数千年前の土器・石器と五十年前のガラス瓶を同列に語ることは難しいですが、釧路から出土したものは、その時期に関わらず今の釧路を形作る歴史のひとつです。百年後には今回出土したガラス瓶が展示資料として脚光を浴びることになるかもしれません。

(釧路市埋蔵文化財調査センター
澤田 恭平)



に恵まれた職場がほかにあるでしょうか。

毎朝、晴れ渡った空のような新たな気持ちで仕事に向かい、毎夕、疲れを洗い流してくれるような空気に包まれて帰途につく。人の世は不条理に満ちていて、職場でも、やりがいのある仕事や楽しい仕事ばかりが待っているわけではありませんが、博物館とともに見た風景は、いつも私の心の支えでした。

最後になりましたが、この場をお借りして、お世話になったたくさんの方々感謝をお伝えします。3年間、本当にありがとうございました。

博物館は宝の山です。資料も、一緒に仕事をする仲間も、博物館で支えてくれる人たちも、そして、私の愛するこの風景も。

(館長 佐藤 志敦)

退職にあたり

これを書いているのは、退職まであと二月ほどとなった1月のことです。まだ来年度の予算も確定しておらず、2月議会や、新しい年度に向けた取り組みの準備、引き継ぎ書の作成などで忙しくしており、博物館での3年間をゆっくり振り返って懐かしむ余裕はありません。けれど、そんな中でも真っ先に思い浮かぶのは、博物館が40年以上前から見ていた風景、私が共有した風景のことです。

この3年間は、自宅が近いこともあって徒歩で通勤していました。ご存知の方も多いと思いますが、釧路市立博物館は、面積100ヘクタールを誇る春採公園に建っています。こんなに立地